

# 報道の過ち 繰り返すな

## 100歳のジャーナリスト むのたけじさん



むの・たけじ 本名・武野武治。1915年、秋田県生まれ。36年東京外国語学校（現・東京外大）卒。報知新聞、朝日新聞の社会部記者として活躍。戦争責任を取る形で45年8月15日に朝日新聞を退社。48年、秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊。78年に休刊するまで主幹として活躍した。現在も著作や講演活動を通じてジャーナリストとして活動している。「希望は絶望のど真ん中に」（岩波新書）など著書多数。ジャーナリズムは「民衆生活の朝夕の相談相手。個体と全体をつなげる絆の大切な一本」という。

中日新聞を含め、新聞は戦前から敗戦までの間、戦意高揚をおおった負の歴史を背負っている。「戦時中は言わなきゃならないことを言えない状態が続いた。同じような過ちが今、繰り返されているように思う」。戦後七十年の夏、そう警鐘を鳴らすのは戦争報道に携わった責任に向き合い、敗戦を機に新聞社を去った、むのたけじさんだ。マスメディアは「戦争」とどう向き合っていくべきなのか。今年百歳になった硬骨のジャーナリストに聞いた。（東京社会部長・瀬口晴義）

■辞めたのは愚か  
敗戦前夜、朝日新聞社会部の記者だったむのさんは「明日からここには来ませんと社を辞める決意を同僚に伝えた。一九四八年二月、郷里の秋田に戻り、タブロイド判の地域新聞を発刊。真っ暗な世の中を照らしたいという思いで名づけたのは「週刊たいまつ」。約三十年間に社会の矛盾を追った。休刊後もジャーナリストとして活動するむのさんが四十年から翌年にかけて琉球新報が企画した「沖縄戦新聞」だ。現在の情報と視点、体験者の証言を盛り込んで再構成し、計十四回、太平洋戦争の主要局面を報

### 自己規制 新聞をために



刊たいまつ」。約三十年間に社会の矛盾を追った。休刊後もジャーナリストとして活動するむのさんが四十年から翌年にかけて琉球新報が企画した「沖縄戦新聞」だ。現在の情報と視点、体験者の証言を盛り込んで再構成し、計十四回、太平洋戦争の主要局面を報

### 9条守る闘い 堂々と

「辞めたのは愚かだったなあと思っただね。敗戦翌日から、戦争の真相はこうだったと連載記事を書けばよかったんだ。記者だけではなく、自動車の運転手でもいい。こんな経験をしたと書き続けば……。一人が立ち上がればみんなが賛成した。一社がやれば他の社も続いたでしょ。辞めずに腰を据えて、とことんやり抜くという生き方もあったと思ひ知らされたね」

■反逆者になつて  
戦時中、憲兵隊や特高警察、内務省の役人が直接、新聞社の中に入り込んで記事内容に干渉し、取り締まったようなことはなかったとむのさんは振り返る。「軍部と対立すれば新聞社の経営が成り立たなくなるとでしょ。安全のために、三段階ぐらいで原稿をチェックする体制が社内にできた。これが活気を失わせたの。新聞社をためにしたのは自己規制。コミュニケーションの企業なのに、見ざる、言わざる、聞かざる、の世界ですよ」

軍部の弾圧が激しかったと思われているが、本質は違ふところにあるというのがむのさんの見方だ。「新聞社の側から報道の活力を奪つようなことをやっちゃったの。自己規制が新聞をむしばんだ。今もその過ちを繰り返してないか。お上品ぶったセルフコントロール（自己規制）に対する反逆者になつて壁を破ってほしいな」

9・11の米中核同時テロの首謀者とされるアルカイダのビンラディン容疑者へのインタビューは世界どのメディアも実現できなかった。「何のためにあんなテロを起こしたのか、直接聞かなきゃだめですよ。ニューヨーク・タイムズがやると思ったが、やらなかった。最後に米軍に殺された。証拠隠滅だと言論で戦った新聞はなかった」

憲法九条は敗戦国への処罰として連合国軍から与えられた側面があるかもしれない。しかし、それを逆手に取って九条を守る以外に人類が生き残る道はないという闘いを堂々とやっていたらいいという。「それこそ新聞がやるべきじゃないですか」

むのさんが新聞の経営者だったらページ数をうんと減らして、中高生が「面白い」「ためになった」と思う新聞を作りたいという。「今までの作り手のマンネリズムをぶち破らないと読まれないよ」。夢を語る口元がほころんだ。